



沖縄やんばるの森 —甦れ！ 生物多様性の森へ—

八千代エンジニアリング株式会社 環境部 部長 **飯島 康夫**
Yasuo Iijima

(1) 沖縄島は千葉県・福岡県なみの人口密度

「沖縄島の北部は、標高 400m 以上の山々が連なり、スタジイを中心とした亜熱帯常緑広葉樹林の豊かな森が広がっている。この豊かな森が広がる地域は「やんばる」と呼ばれ、多くの固有種を育てている。」
・・・このようにご説明しますと、日本南端の過疎の島の物語のように聞こえますが、この島の人口密度は約 1100 人/km² で、千葉県や福岡県なみの多さである。このように沖縄島は多くの人の暮らしと身近なところに多くの固有種が生息しており、そのような地域は世界的にも非常にまれである。

(2) なぜ固有種が多いのか

沖縄島の北部にある「やんばるの森」は日本の面積の 0.1% にも満たない地域で、ここに固有種や生きた化石と呼ばれる遺存種が数多くみられる。オキナワトゲネズミやノグチゲラ、イシカワガエル、クロイワトカゲモドキなど・・・このような固有種が多いのは、この島が中国大陸から分離した地殻変動（地史）と温暖な海に囲まれた亜熱帯常緑樹林の発達などが大きく影響したことによる。これは地球規模の奇跡である。

(3) 固有種ヤンバルクイナの危機

固有種の代表であるヤンバルクイナは 1981 年に新種として記載された。真っ赤なくちばしと足が特徴であり、翼が退化して小さいため、日本で唯一の飛ばない鳥である。

このヤンバルクイナは最も絶滅の危険性の高い種の 1 つであり、その絶滅危機の要因は外来生物（マングース）やノネコによる捕食と考えられる。



(4) 外来生物マングース(表紙写真)

沖縄にいるマングースは 1910 年にハブとネズミ駆除の目的でガンジス川流域から沖縄島南部に導入された。しかし、マングースは昼間に行動し、ハブは夜間に行動する動物であるため、自然界では出会う頻度はめったになく、ほとんどその効果が得られなかった、と考えられる。沖縄島は肉食哺乳類が生息しない地域であったため、マングースは簡単に食物連鎖の頂点に立つことができ、固有種が多く生息する北部地域にまで分布を拡大し、貴重な固有種も捕食して繁殖してしまった。

マングースの対策が始まったのは 2000 年で、1910 年からわずか約 90 年間で、わずか 17 頭から数万頭に

まで増殖し、沖縄島の生態系に多くの悪影響を与えている。

外来生物マングースの主な対策はワナによる捕獲であり、現在およそ 15000 個のワナがやんばるの森に仕掛けられている。2000 年から捕獲を開始して、毎年捕獲規模が拡大し、ここ数年でマングースの生息数は明らかに減少している状況である。これまでの捕獲努力により、ケナガネズミやヤンバルクイナなどの在来種の生息範囲が広がる傾向にある。

(5) マングース北上防止柵

固有種が多く生息する地域を最優先に保全するために、「やんばるの森」の南側に柵を設置し、マングースの南側（高密度域）からの侵入を防いでいる。高さ 120cm、上部に幅 30cm の金属板を取付けた形状の柵を、塩屋湾と福地ダムを結ぶライン（SF ライン）に約 4 km にわたり設置した。柵の効果は、柵の南北でのマングース密度調査から証明されている。



マングースの分布拡大



北上防止柵



ワナの設置点検作業

(6) やんばるの森の未来

「やんばるの森」は外来種対策が進んだことで在来種が回復し、元の「生物多様性に富んだの森」に戻つつある。また、この自然との寄り添う生活してきた地元の人々は、この自然をより有効に活用することを考え始めている。COP10 における愛知ターゲットのひとつである「持続可能な自然と共生する社会」の実現のヒントが、多くの人の暮らし「やんばるの森」にあるように思われる。